

非暴力で平和を！
メル・ダンカン氏の来日講演
安藤 博(非暴力平和隊・日本)

日本で、世界中で、「戦争」がのさばり出しています。安倍政権は「『北』の脅威」「海洋に乗り出す中国の横暴」を喧伝して「集団的自衛権行使」を閣議決定（2014/7/1）し、外地の戦争に乗り出すことができるようにするための“戦争立法”（2015/9/19）を敢行しました。戦後 71 年間、日本が一度もしたことの無い殺し殺される戦争を外地で行おうとしているのです。

こうした情勢を食い止めることを願って、非暴力平和隊・日本（#1）は国際平和活動のリーダーで＜非暴力平和隊＞の創設者、メル・ダンカン（Mel Duncan）氏（#2）を 2016 年 7 月初め日本に招き、東京、京都、広島で四回の講演集会を行いました。暴力に対して暴力で立ち向かうのではなく非暴力で平和を作ることを説くダンカン氏の講演を紹介しながら、わたしたちは何をすべきか、できるかを考えてみました。

【10 の手法】

講演の中心は非暴力平和隊が行っている活動の紹介です。隊員が派遣されている現場の実例を挙げて、どのような活動が行われているかが丁寧に説明されました。たとえば 200 人が活動している南スーダンでは、女性たちが炊事用の薪を集めに行くのに隊員が同行します。内戦を続けている現地軍兵士に強姦されるのを防ぐためです。

「護衛的同行」など 10 種の活動手法があるといいます。いずれも和平交渉の前面に立つような表立った活動ではなく、むしろ控えめなものです。紛争地現地の平和活動家を側面から支えて「活動のスペース」を作るのです。「プレゼンス」、紛争の現場に腰を据えて動かないこと一控えめな活動の中でも特に控えめですが、ダンカン氏は紛争現場で静かに平和を定着させていく上で、最も効果的な手法だと言います。

【正義の戦争などない！】

ダンカン氏の最近の活動のなかで、キリスト者にとって特に重要なのは、2016 年 4 月 11～13 日に行われたローマ教皇庁の会議、「非暴力と正義の平和—カトリックの理解と献身」に世界の非暴力活動リーダーのひとりとして参加したことです。この会議が採択した「最終文書」（「福音の中心的メッセージ「非暴力」に立ち帰ろう」）は、「正しい戦争」（聖戦論）を否定しました。ダンカン氏の東京などでの講演集会は「非軍事による平和構築の最前線—南スーダン、シリアでの NGO の活動、カトリック教会の自己改革」と題して行われています。

キリスト教会には、中東地域の異教徒に対して残忍な暴力を奮った忌まわしい歴史があ

ります。聖戦 十字軍です。今日の世界における暴力の一方の旗頭、「イスラム国」(IS)はこの十字軍への報復を彼らにとっての「聖戦」としています。米国、ロシア、そして日本を含めてほとんど世界中の国は、IS をテロリストとして制圧することを正義の戦いとしています。ダンカン氏も加わってまとめられた聖戦否定は、こうした今日の世界情勢を考えると画期的なものなのです。

【“正義の原爆投下”にお詫び】

ダンカン氏の講演のなかで最も感動的だったのは、四回の講演シリーズを締めくくる広島集会講演の終わり近くで米国の原爆投下を「お詫び」したことです。「原爆投下は人類全体に対する犯罪だ。アイ・アム・ソリー」と。これもまた、聖戦の否定です。米国は数十万人の市民をむごたらしく殺した原爆が軍国主義日本屈服させるための正義の武器使用であると、2016年5月米国大統領として初めて広島を訪れたオバマ氏は、「核兵器の廃絶」を訴える傍ら、この大量殺戮を詫びることを避けました。

広島訪問・講演は、ダンカン氏が強く希望して行われました。講演前日、広島平和記念館を長い時間をかけて参観した後、前三回の講演に加える言葉として「お詫び」(#3 “I am sorry”)を起草しました。それは、「お詫び」を避けたオバマ米大統領に代わり、原爆投下の「正義」を否定し、非暴力に全力をかける米国の一市民として必要な務めを果たそうとするかのようなものでした。

【現実的とは】

ダンカン氏は「非暴力・非武装による紛争解決が『理想主義』でも『理想主義』でもなく、いちばん『現実的』である」と言い続けています。非暴力平和隊のメンバーでありながら、私は非暴力が暴力の現実に対してどれだけの効力を持つかに疑念を持つこともあります。

北朝鮮に対してどうなのか？核・ミサイルの脅威を振りかざすことを国際社会で一人前扱いされるための国家戦略とするような国に非暴力が通ずるだろうか。

中国はどうか？南の海の浅瀬を自国領と主張して長距離爆撃機の離着陸もできるような3,000m級の滑走路を作り、その主張を全面的に否定したハーグの常設仲裁裁判所の裁定を無視して自国の権益拡張に猛進する中国を、非暴力で抑えこめるだろうか。

そして日本で。米国の核抑止力に頼らなければ、「北」、中国に対処できない、だから米国から求めがあれば戦争の手助け(集団的自衛権行使)をできるようにしておかねばならないとする安倍政権の現実主義に、非暴力で反論しきれるだろうか。また、そうした安倍政権を支持する日本の有権者多数に対して、非暴力が現実に合わせていると説得できようか—戦争法の廃止を求める「総がかり行動」で街頭に立ち署名集めをしていると「おまえら中国の回し者か」とののしられる、そんなときふと頭をよぎるのは非暴力の非力さです。

ダンカン氏はこうした疑念に力強く答えていました。青年時代のベトナム反戦活動に始まり、世界の紛争地を回ってたたきあげられた非暴力平和活動に対する信念です。もちろん、非暴力がいますぐ万能の効力を発揮するというものではありません。私はこのダンカン氏の現実主義に力付けられるとともに、暴力・軍事力に対する私なりの現実的な判断を非暴力活動の支えとしています。非暴力の反対の暴力・戦争で平和が作られていないことは、それこそ世界の現実です。オランダ・フランス大統領は、15年前の9.11テロ事件を回顧して、「あのテロ攻撃に対する米国（ブッシュ）政権の対応は間違いであった。その後国際テロ攻撃はむしろ拡大し、I Sのような過激イスラム組織が生まれ、世界は一層安全でなくなった」とこのほど Facebook に書き込んでいます。

【何をすべきか、できるか】

自民等の改憲勢力が衆参両院で三分の二多数を占めて国会の改憲発議が可能となつてしまい、安倍首相が執念を燃やす憲法 9 条破壊がいよいよ現実の危機として迫っています。ダンカン氏は講演の冒頭に「日本はこれ以上軍事化しなくても、世界の安全保障に責任ある役割りを果たし国際平和に貢献することが出来る」と述べ、戦争を放棄し非暴力で紛争に対処する方向性を示した第 9 条がすべての国々の手本とならねばないと力説しました。

安倍政権が戦争の出来る国に向けて憲法 9 条の「戦争の放棄」を放棄してしまうのを食い止めるにはどうしたらよいか。私たちいわゆる“本土”の日本人は、沖縄の人たちに学ばねばなりません。明治維新以降、「琉球処分」から今日の米軍基地押し付けに至るまで“本土”から虐げられ差別されてきた沖縄の人たちはいま言っています、「勝つためには、『勝つまで止めない』ことだ」と。その踏ん張りで、いまや沖縄選出国会議員の全てを、安倍政権に抗する野党議員にしまいました。

戦争法廃止の「総がかり行動」は、この夏の参院選でも勝つことができませんでした。だから私はこの先も国会周辺のデモ、駅頭の署名集めなどの活動に愚直に参加していこうと思います。無理はしないで気長に。

【講演者メル・ダンカン (Mel Duncan) 略歴】

非暴力平和隊 (Nonviolent Peaceforce=NP) 共同創設者／特別プロジェクト責任者。

1952年5月25日、米国アイオワ州生まれ。国連・米国議会・新規プロジェクト・その他広報・渉外担当として、活動拠点の選定や具体的な活動の計画等で重要な役割を果たしている。とくに活動資金確保のために不可欠な国連や米国政府等に対するキャンペーンに、無類の力量を発揮している。その活動の便のためミネソタ州の自宅を離れ、多くの時間をニューヨークで過ごす。

□学歴：マカレスター大学卒（セント・ポール、ミネソタ州）

□家族：妻と8人の子ども（すべて発達障害児の養子）

□主な経歴：1960年代、ベトナム反戦運動に参加、兵役拒否。1979年、全米初の発達障害児の支援組織NGO設立。1990年代、イラクへの医療支援。1999年ハーグ平和会議に参加、デビッド・ハートソーと共に非暴力平和隊設立に合意。2002年、インドで非暴力平和隊設立総会を開き、現在まで非暴力平和隊の者として重要な役割を果たしている。2015年6月の「非武装の文民保護（UCP）に従事しているNGOのこれまでの貢献に鑑みて、国連平和活動はこれからもっとこれらNGOとの連携をはかるべきである」という勧告を含む「国連平和活動に関するハイレベル独立委員会報告書」採択に多大の貢献をした。2016年4月11～13日、ローマ教皇庁の〈正義と平和評議会〉とNGOパックス・クリスティ・インターナショナルとの共催で行われた会議、「非暴力と正義の平和——カトリックの理解と献身」に世界の非暴力活動リーダーのひとりとして参加。